

世界中のすべての人々が傷つけ合うことなくみんな幸せに、子どもと自然がのびのびと

子どもと自然 学会通信

2012年9月20日発行 47 (vol.10 no.3)

Society of the Child and Nature

発行：子どもと自然学会＝日本学術会議協力学術研究団体

- 目次 子どもと自然学会ながの大会案内(2)
子どもと自然学会福島大会シンポジウムまとめ①(4)
子どもと自然学会福島大会シンポジウムまとめ②(8)

第18回ながの大会

大会テーマ：「どうする自然離れ」

開催期日 2012年 11月24日(土)
25日(日)

開催会場：信州大学・飯縄高原

(p. 2をご覧ください)

1日目：一般発表／懇親会／第9回全国学生交流集会

2日目：フィールドワーク／シンポジウム／

子どもと自然学会 第18回ながの大会のご案内

テーマ「どうする 自然離れ！」

信州の美しい自然が見捨てられてゆく現状とその豊かな自然を子どもたちの育ちに活用している事例など、人と自然とを結ぶ活動の実際を信州の現場で見させていただきます。また、各地の事例から学びつつ、これからの子どもと自然のありようを考え、討論します。

■期日 2012年11月24日(土)・25日(日) タイムテーブル

11月24日(土)

12:00	13:00	17:00	18:00	19:30	21:30
受付 (信州大学教育学部E館)	一般発表	飯網高原に移動	懇親会 (アゼイリア飯網)	20:00~21:30 学生交流会 (飯網高原ネイチャーセンター) (バス移動) <自由交流>	

11月25日(日)

9:00	11:30	12:30	13:00	15:00
フィールドワーク (飯網高原ネイチャーセンター) 冒険あそびの森 こどもの森幼稚園	昼食 (バス移動)	学生交流会 報告	シンポジウム (長野県環境保全研究所飯網庁舎)	

■会場・内容案内

24日 一般発表：信州大学教育学部E館(〒380-8544 長野市西長野6)
一般宿泊・懇親会：アゼイリア飯網(〒380-0888 長野市上ヶ屋2471-79)
Tel. (026) 239-2522

学生交流会・学生宿泊：飯網高原ネイチャーセンター

(〒381-0074 長野市中曾根2124-161) Tel. (026) 239-3301

25日 フィールドワーク：飯網高原ネイチャーセンター・冒険あそびの森・こどもの森幼稚園
*冒険あそびの森で小学生40名の活動の様子を見学し、意見交換をします。
*こどもの森幼稚園は休日ですが、施設の様子と活動理念など紹介いただきます。
シンポジウム：長野県環境保全研究所飯網庁舎(〒381-0075 長野市北郷2054-120)
*テーマ「子どもの自然体験を促す方法～学校登山の意味(仮)」を予定

会場へのアクセス(公共交通機関)

- 信州大学教育学部へは、JR長野駅善光寺口からバス約10分「信大教育学部前」下車
(市内循環バス「ぐるりん号」 各時間帯 10・30・50分長野駅前発)
- *アゼイリア飯網と飯網高原ネイチャーセンター宿泊者；会場間の移動に無料バスを利用できます。25日シンポジウム後も、JR長野駅まで無料バスでお送りします。

■参加申込：各自（1名ごとに）申込書で10月17日（水）必着にてお申込みください。

■費用：当日受付でお支払いください。おつりが無いようご協力ください。

- | | | | | | |
|-----------|----|--------|----|--------|---------------------|
| ・大会参加費 | 一般 | 1,000円 | 学生 | 500円 | |
| ・懇親会（宿泊有） | 一般 | 9,000円 | 学生 | 6,000円 | |
| ・懇親会（宿泊無） | | 3,500円 | | | |
| ・25日の昼食 | | 600円 | | | *付近にはコンビニや食堂はありません。 |

■一般発表の要旨は以下の様式で e-mail 添付にて送付してください。

- ・A4判 1頁（上下左右各2.5cmを余白としてください。）
- ・発表タイトル、氏名・所属（発表者に○を）、本文、下段に連絡先など
- ・作成ソフト MSWord（マイクロソフト ワード）97-2003, 2007, 2010
- ・締切り **10月31日（水）必着** *申込みより2週間後です。お忘れなく！

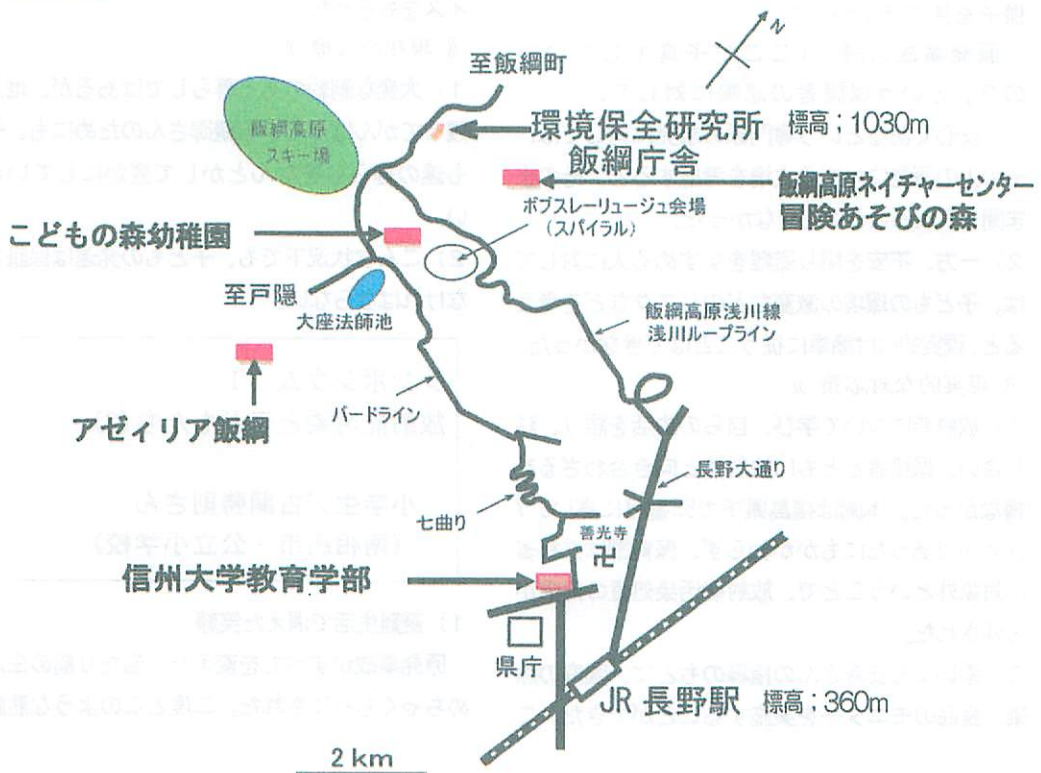
■問合わせ／申込書・発表要旨 送付先

ながの大会実行委員会

〒380-8544 長野市西長野6 信州大学教育学部 渡辺隆一 気付

e-mail: wataryu@shinshu-u.ac.jp Tel&Fax: (026) 238-4164

■会場位置図



子どもと自然学会第17回福島大会 まとめ①

お世話になった福島大会から、はや、4ヶ月になろうとしています。「私たちのことを忘れないでほしい」と福島の人たちから言われました。そのためには、日本国民の問題としての位置づけをもってして、原発再稼働や事故処理等の問題も考える必要があります。そのためにこそ、福島大会を紙上再現します。まずは「シンポジウムⅠ」から。続けて「シンポジウムⅡ」を。

実行委員長 三石初雄さんの挨拶

福島大学に19年半お世話になった者として、福島に恩返しをしたいという気持ちでシンポジウムを企画した。福島の人々は自然の豊かさを知っているのだから、その原体験が復興の力となってくれるものと考えている。

シンポジウムⅠ 放射能汚染と子どもたち(1)

幼児／齋藤美智子さん
(福島市さくら保育園)

さくら保育園に来られた皆さん方には、本来であれば自然の中で子ども達が育っている様子を見てほしかった。

原発事故以降、「ここで子育てしていいの？」という保護者の悲鳴に対して、

1) 安心であるという専門家の意見に対しては、その人の原発に対する立場を考慮すると、そのまま聞き入れることはできなかった。

2) 一方、不安を煽り避難をすすめる人に対しては、子どもの環境の激変などのリスクなどを考えると、現実的には簡単に従うことはできなかった。

《現実的な対応策》

1) 放射能について学び、自らの生活を語り、話し合い、保護者とともに放射能と向き合わざるを得なかった。本園は福島県下で55番目に高い5.7 $\mu\text{Sv/h}$ であったにもかかわらず、保育園は文科省の対象外ということで、放射能汚染処置の対象から外された。

2) 幸いにも安斉さんの指導のもとに、園庭の除染、食品のモニターを実施することができた。こ

の結果を受けて、自治体予算による除染によって園庭の放射能レベルを1/10以下に減少させることができた。但し、犬走りの部分は対象外となった。

3) 保育園での具体的な取り組み

庭遊びは1日30分だけに制限している。砂場は砂を入れ替えたが、利用していない。零歳児をカートで外に連れ出すと、自然を見て指差しをしている(外遊びの重要性)。

・プール遊びは安斉さんのアドバイスを受けて、細心の注意を払って実施できた。

・三輪車に乗っていた4歳児が、7ヶ月乗っていなかったら、漕げなくなっていた。

・保護者から、いろいろなアドバイスももらった。インターネットの情報に惑わされないようアドバイスももらった。

《現在の目標》

1) 大変な制約のある暮らしではあるが、地元に残ってがんばっている親御さんのためにも、子ども達の暮らしをなんとかして豊かにしていきたい。

2) こんな状況下でも、子どもの発達には保証されなければならない。

シンポジウムⅠ 放射能汚染と子どもたち(2)

小学生／古関勝則さん
(南相馬市・公立小学校)

1) 避難生活で消えた笑顔

原発事故がすべてを変えた。当たり前前の生活をめちゃくちゃにされた。二度とこのような悲劇を

起こしてはならない。そのためにも、多くの人に福島の実情を知ってほしい。計画的避難地域の山木屋地区で自殺者が出た。

2) 学校の様子と方針

子ども達は夏でも長袖、長ズボンで、教室の窓も開けられなかった。運動会を実施したが、土に触れないように、また時間を短縮して実施した。長時間の通学で、家に帰っても友達がいなかったため、ゲーム漬けとなった。各家庭は大変な状況にあったので、学校生活の中に日常を保障していく必要があった。原発事故のあとの混乱期のあとは、学校では生徒がわずかとなり、今まで行われていた対面授業や出張などがなくなったため、時間的にゆとりができた。その結果、先生たちは子ども達に優しくなれて、子どもの気持ちを十分聞く事ができた。しかし、しばらく経つと、元の忙しい学校に戻ってしまった。

「いつ我が家に戻れるか」という見通しが無い。子ども達はバラバラになる。自然体験ができない状況である。福島県教育委員会は、こうした子どもや保護者達の苦しみに対応することなく、普通の学校にする事ばかりを強制している。結局、個々の学校は国や県の指示を待つのみで、それが絶対であるとする教育界の弱さが露呈した。競争的な学校に戻そうとする県教育委員会の方針に矛盾を感じる。

3) 放射線教育のあり方

学校での放射線の学習「文科省の副読本」がいち早く出された。これでいいのかという疑問が大きくなった。多くの教師は副読本の趣旨のままに教えている（自分でものごとを考える教師が減っているのでは？）。副読本の趣旨は放射能は自然界にもたくさんあって、正しく使えば有効なものであるというものである。現実の避難民の生活を考えたら、こんな趣旨では絶対教えることはできない。放射能は危険なものであるという前提に立った教材が必要である。

4) 困難な状況におかれている子ども達と教職員

- ・ 将来が見えない不安

- ・ 教職員の苦悩（保護者との関係構築の困難さ。学校が機能不全となったために起こった諸問題。

5) 否定の中に見える肯定

- ・ 人のつながり
- ・ 地域で励まし合う姿
- ・ 学校の在るべき姿（忙しければ、子どもに優しくできる）
- ・ しっかりとした学び

〈 質疑応答 〉

Q：放射能の副読本について、教育委員会の態度はどうか？

A：先生たちからのクレームに対して、検討しますという回答である。日本環境学会などいくつかの学会で、放射能に関する副読本的なものを検討している。

Q：福島大学で出した放射能に関する教材はどうか？

A（遠藤さんから回答）：あのままでは授業に使用できないので、どう教えたらいいか。具体的な指導案を福島大学にお願いしている。

シンポジウム I

放射能汚染と子どもたち(3)

中学生／遠藤慎一さん
(南相馬市・公立中学校)

1) 原発事故による被害の甚大さ・深刻さ

- ・ バラバラにされた子ども達（南相馬市の生徒は県内外の110校へ転校している）
- ・ 学校再開の悲惨な状況（長距離通学、悲惨な給食、運動できない状況、0.38 μ Si/hの基準値で再開させた学校は、本当に安全なのか心配）

2) 文科省、県教育委員会・地区教育委員会の姿勢

- ・ 教職員の配置（突然剥がされていく先生達）
- ・ 「学力向上が復興の要」とする教育委員会の姿勢
- ・ 放射線・放射能についての学習→文科省「副読本」

本」がいち早く出された

・平成24年を復興元年として位置づけ、学力向上、理科向上を目指すとしている。学力オリンピックや学力学習状況調査を実施し、競争力を煽っている。PDCA(plan-do-check-act cycle)という生産管理・品質管理の手法を学校教育に適用しようとしている。現在は学力向上よりも、子どもに安心、安全を保障し、生きていることに喜びを見いだせることが求められている。原発事故を引き起こした学力ではなく、本当の学力、だまされない学力が求められている。

3) 放射線教育

・放射線教育の副読本としては、福島県教組は「放射線ってなに?Q&A」を配布した。それで授業をしたところ生徒からは次のような疑問が出た。

・体内に入った放射能は、どんな影響を及ぼすのか?

- ・原発は、また爆発するのか?
- ・被曝によるDNAの損傷について知りたい
- ・脱原発の発電を考えてほしい
- ・学校に放射能のないドームを作してほしい
- ・なるべく被曝しないように生活したい
- ・住民運動の中で、子どもの成長保証に関する学習会を開催。放射能を浴びたことに対する不安(被曝線量と病気の関係、DNAへの損傷など)、福島県の対応、脱原発など。

《 質疑応答 》

Q 1 : 放射能汚染地域で仕事をせざるを得ない先生の心情は?

A 1 : 100 人いた医療従事者が半減した。一方、学校の先生の場合は、ほとんど

は現場にとどまっている。若い女の先生が仙台から通っている例がある。

A 2 (古関先生) : 家族がバラバラになったり、長距離通勤を余儀なくされている先生もいる。

シンポジウム I

放射能汚染と子どもたち(4)

福島大学の学生の取り組み／

佐藤由季さん・御代田桜子さん

・三浦浩喜さん

(福島市福島大学)

最初に県外の参加者がどのくらい居るか確認したが、参加者約60名のほとんどが県外からであった。

1) 福島県の浜通り、中通り、会津の三地域での被害状況の違いや特徴が紹介された。

2) 福島大学の子ども支援ボランティア活動

・第一期(2011年3月～8月) : 人類発達文化学類単独の福島市と郡山市の避難所での学習支援活動、遊び支援活動、自然体験学校、移動教室ボランティア

・第二期(2011年9月～2012年3月) : NPOと連携して、6カ所の仮設住宅と福島大学キャンパスでの学習支援活動、遊び支援活動、クリスマスパーティーや日曜子どもキャンパス、わくわくステップアップキャンプ、移動教室ボランティア

・第三期(2012年4月～現在) : NPOと連携して、6カ所の仮設住宅と福島大学キャンパスでの学習支援活動、遊び支援活動、自然体験学校、移動教室ボランティア

3) 避難する子ども達

・健気がんばる元気な子ども達、しかし、避難生活の「間」(希望校や部活などをあきらめざるを得ないことなど)

・絶望、未来への不安(ある小学生の「結婚できないんでしょう、子ども産めないんでしょう」という発言

・断片化する人間関係(友達・親族の離散、支援者達との出会いと別れ)

・学校での平常時モードと緊急モードの混在、「不安定」の恒常化

・地域での子ども達を問題へと向かわせる要因の増大と、問題行動を押しとどめるコミュニティの減退。

《 質疑応答 》

Q1：ボランティア活動場所への交通手段は？ 昨年と今年でのボランティア活動の人数の減少の理由は？ ボランティア同士での協力体制は？

A1：大学がバス2台をチャーターして仮設住宅などへ通った。昨年度のボランティア活動の登録者のなかには、実際は参加できなかった人が多かった。ボランティア活動に継続的に参加できる人は限られていたのので、メーリングリストや話し合いで、活動内容の共有化を図った。

《 全体討論 》

「学生ボランティア活動に関連して」

Q1：学生ボランティア活動をする前と後で、学生自身はどう変わったか

A1：自分は昨年は福島県の教員試験が受けられなくなってしまったが、将来的には福島の子どもの関わっていきたいと思っている。その思いが強くなった。

A1'：福島県の問題を、より自分の事として考えるようになった。

Q2：仮設受託の子どもたちは普段はゲーム漬けなのに、ボランティア活動のときは熱心に学習に集中できたのは、なぜか。

A2：子ども達は大学に来ると、緊張感が出たためと思われる。

「学力について」

Q1：騙されない学びをするためには、どういう学力が必要と考えるか？

Q2：福島の子どもの様子を聞いて、阪神淡路大震災と大変似ていることに驚いた。福島の子どもたちは、これから復興の担い手になれるように学びをする必要があると思う。

A1：今回の原発事故も、過去の船倉や食品添加物な

どの問題と同様に、騙されない学力、真実を見抜く力を養う必要がある。また、地域を豊かにする学びや地域復興の力となる学力が必要である。

A2：原発をつくり、事故を起こしても謝らないような学力ではない。現在、世界で起きている事柄(例えば異常気象、環境破壊、劣化ウランなど)をきちんと考えて、どのように生きていくかを考えることができる学びが必要である。相馬市では教育委員会から偏差値53以上にするを目標にするように指示されている。教職員自身が学ばないと、教育現場がとんでもないことになる。

「自然体験の重要性」

Q1：小学生の女の子の「子どもを産めないんでしよう」という発言に対しては、チェルノブイリ事故では、「みんな子どもを産んでいる」ことや、「癌に罹っても生き続けている」事実を伝えてほしい。ウクライナでは国の予算で、被災した地域の学校が、まるごと長期間移動して自然体験できる制度を作っている。

Q2：福島の現状が、まだまだ十分に伝えられていない。私は小学校のクラスで、原発賛成・反対の議論をしてもたつた。自分で考える力を身につけさせることが重要であると考えている。

Q3：子どもと自然学会は、子どもの成長にとって自然がいかに重要であるか研究しているところである。福島の子ども達がしなくてもいい放射能汚染を受けている。これらを「克服する学び」が必要である。

A1(古関先生)：子どもの自然体験の機会を設けることには大賛成である。現場では、教育委員会のやり方には不満を抱いている。

A2(遠藤先生)：自然体験制度は、現場の先生だけでは無理なので、専門家やボランティアの協力を頂きたい。また、福島の先生方にも、年1ヶ月ほどの自然体験の機会が必要と思われる。

「幼児の発達における自然との触れ合いの重要性」

Q1：さくら保育園の話聞いて、幼児の発達

における自然との触れ合いの重要さが印象に残った。「外に出たときの自然への指差し」、「自然の中で体を動かす事の重要さ」

A1：室内でできた鉄棒が外ではできない。室内での階段登りと外の神社での階段のぼりは違う。安心できる自然公園を身近かにたくさん欲しい。

「その他」

Q1：このシンポジウムで、「原発事故に負けない強さ」や「地元でがんばろう」という話に感激した。

Q2：文科省の「放射線の副読本」については問題が多い。わたし（三上さん）自身もそう感じたので、原稿をまとめている。読みたい方は連絡いただきたい。

追加報告（シンポジウム2との関連）

「大熊町で有機農業を行っていた渡部隆繁・栄子夫妻」の紹介と挨拶

渡部隆繁さん：大熊町から会津へ避難している。放射能汚染物質の中間貯蔵施設のための土地買い上げが、一昨年の課税評価額を基にするという説明を受けている。われわれ農家にとっては、農地を返してほしいという思いである。将来の子どものことを考えて、中間貯蔵施設の早期実施の署名活動をしている。大飯原発の再稼働をさせてはいけないと考えている。

渡部栄子さん：新しく先生になる方々も、子どもに負けずにがんばってください。私たちが有機農業を再開することができたら、ぜひ生徒を連れて体験学習に来てください。

（文責：玉生）

子どもと自然学会第17回福島大会 まとめ②

1日目は福島大学を会場にお借りしてのシンポジウムでした。2日目は野球場の中の会議室でのシンポでした。ほとんど満員の中でのお話が始まりました。1日目のテーマは子ども達がどうしているかでしたが、2日目は「シンポジウム II 放射能と市民生活」です。

シンポジウム II 放射能汚染と市民生活(1)

食の分野から
大波昌子さん
(さくらみなみ保育園栄養士)

さくらみなみ保育園は、緑豊かな平石の地に2006年開園。子どもたちが豊かに人間らしく育つための保育をめざしている。給食は保育の大事な柱。「食はいのち」をモットーとしてきた。スライドで紹介しながら報告する。

園舎の中央に給食室があり、大きな窓から子どもたちが興味関心をもって、覗ける様になっている。

ゼロ歳児が離乳食を食べているところだが、一人一人の発達を大事にするということで食の意欲を持たせたいため、手づかみで食べる

ことを大事にしている。

<食事作りで大事にしていること>

・レジュメで8点あげてあるが、特にこだわっているのが「食材」である。安全や地産地消ということで、輸入食品は全く使用していない。おやつにバナナやグレープフルーツなど使わない。

・「食の営みを学ぶ」ことでは栽培やクッキングを大事にしてきた。

<2011年3月11日放射能汚染により失われたこと、変化したこと>

○自然とふれあう生活 ○田畑づくり

- ・毎日の散歩
- ・4月の恒例行事のヨモギ摘みとヨモギ団子作り
- ・近くの桜のきれいな城山への遠足
- ・5月 田植え 裸足でどろんこになりながら
- ・園の隣の畑ではクラスごとにキュウリ、トマト、ジャガイモ、ピーマンなどを作っている

る。野菜の嫌いな子が自分で作ったものだけは食べてみようとする。

・山菜バイキング料理 コシアブラ、コゴミなどバイキングで食べる。子どもたちに大人気。

・6月 チマキクッキング 福島産の笹で作る。

・8月 流しそうめん プール納めに流しそうめんをする。そうめんだけでなくトマトやキュウリ等も流し、大喜び。「つゆ」が水のように薄くなっても、本当によく食べる。楽しい行事だった。

・イナゴの佃煮づくり ゆでたイナゴの羽根を子どもたちは真剣にもぎ、佃煮にして食べた。

・11月 畑でのさつま芋掘りとたき火と焼き芋

・12月 餅つき 皆でつき、つきたての餅をたくさん食べた。

・1年を通じて行ってきた自然の中での全ての行事や外遊び、毎日の散歩(0歳児も乳母車でしていたのに)が全くできなくなってしまった。現在は除染してやっと園庭にでられるようになったが、それも1日に30分だけである。子どもたちにとってはつらい毎日が続いている。

○地域とのつながり

・田や畑作りについては、いつも地域の人たちが面倒を見てくれた。このつながりがなくなってしまった。

○地産地消

・食材にこだわってきたが県産の野菜・牛乳などが使えないということで、子どもたちの内部被曝をどう防ぐかということに悩む毎日。3月までは基準値が500ベクレルという高さで安心できず、県産でなく、なるべく遠くのもの、できれば西日本のものをという気持ちになっているが、流通の中でなかなか探せない。

今年から基準値が100ベクレルになったが、子どもたちにはこの値も高すぎると考えている。きちんと測定したものが市場に出回っていない不信感もあり、どうしても遠隔地産の

ものを選ぶことになってしまっている。

遠隔地産ということになると、この地の季節に合わないものを選ぶことになる。たとえば4月にこの地では採れないタケノコ(熊本産)を食べるなど。これまでの地元・平石の米でなく山形産の米を、ワカメも三陸産から鳴門産に、牛乳も地元産に放射能が検出されたので北海道産に代えた。魚も同じ遠隔地のものを。ゼロ歳児のミルクの水はミネラルウォーターにした。

本当なら地産地消で産地が近くだと安心してきていたものが、逆に、納品書などで産地が近いとがっかりする様な感覚になってきていることが悲しい。

・食品の測定をきちんとやろうとしている

今年の4月からは毎日、支所などで、使う食材を丸ごとカッターにかけて測定できるようになった。

○行事のたびに思案し、悩む日々

・昨年チマキづくり 笹はこれまで会津産だったが心配だった。チマキという郷土食は大事にしたいので山形産の笹をつかってやった。

・流しそうめんは園庭では無理だということできりやめに。行事のたびに悩む日々となっている。

○父母の思い

・食品の放射能汚染に気をつけている人が9割(昨年の12月調査)。食材を遠隔地から取り寄せたり、水はミネラルウォーターにしているなど。調理法もゆでこぼしたりと工夫をしている。保育園での給食についても「食材はなるべく県外からのものを」という親の声。
・悲しい話だが、祖父、祖母が作っているものを食べないわけにはいかないので心配だが食べているという親もいる。

<3・11後 給食で大事にしてきたこと>

・4点(汚染の少ない食品を選ぶ・放射能検査で安全を・免疫力を高める献立や食材・食べ物への関心をもたせ、触れる機会を多く)を大事にしてきた。

・現在、散歩や栽培ができずに残念だが、クッキングでの皮むき、野菜を切ったり等は園

児にやらせている。年長の子は特に震災後は力を入れてやっている。

・タケノコの皮むき 1本 1980円もする高い熊本産のタケノコを使ってやった。菊の花をちぎっているところ。「花も食べるんだ」といながら園児もちぎってくれた。

・うどんのクッキング 朝から生地を練ったり足で踏みつけたりして一日かけてのクッキング

・豆腐を手に載せて切れるようになっている。(映像を見てシンポ会場からどよめき)

・魚を見る会もやった。丸ごと魚を見て触れて目の前でさばいてもらって食べた。佐賀県のブリだった。子どもたちは興味津々で、苦手な子もこの時ばかりはぺろりと食べた。

・野菜にも触れたり、においをかがしたりする機会を増やしている。

＜これから行政にやってほしいこと＞

○給食室に食品の放射能測定器を設置してもらいたい

・話はあるが具体化されていない。

・市場に流通する食品も全体的な検査体制をとり、情報の提示をして欲しい。福島産であっても放射線量が少なければわたし達は使える。

○徹底的な地区の除染を

・田んぼが今年は作れなかったもので、このように荒れている。畑も雑草だらけ。子どもたちは誰も足を運ばない。

・園庭には放射能測定器があって、これを見ると不気味に感じる。その前で子どもたちは遊んでいる。それでも、笑顔で遊んでいる。

・外活動が減って子どもたちの食欲は落ちた様な気がする。でも給食はとても楽しみにしてくれている。

・2010年、畑でのジャガイモ掘りの子どもたちの様子。皆、笑顔でバケツを持って張りきっている。こういう日々が早く戻ってくるように、こうした日常が帰ってくるのがわたし達の願いである。

《 質疑応答 》

Q1：食材の放射能測定器について

A1：(測定器が備えられているさくら保育園の保育士の答え) 測定器は外部から善意で借りているものが2種類。一つは、食材そのものを、調理する前に測定するもので、放射能の有無を検知する簡易測定器。もう一つは放射能を検知した後に、測る精密測定器。

(大波) さくら保育園とさくらみなみ保育園は同じ系列の保育園だが園が離れているので協同では使用できない。

文科省管轄の小学校には各学校に食材の放射能測定器が置かれているが、厚労省管轄の保育園には置かれていない。幼児の方が影響が大きいので、まず、保育園に置いて欲しいと思っている。

Q2：保育園の中に保護者と放射能について勉強する場はあるか

A2：これまで外部から専門家をよび何回か学習会をもち、保護者と情報を共有した。砂遊びの是非なども保護者アンケートなどで保護者の意向を聞きながら、進めている。

シンポジウム II 放射能汚染と市民生活(2)

有機農業が創る、
持続可能な新しい時代へ
菅野正寿さん
(福島県有機農業ネットワーク代表)

プロジェクターで映像を見せながらの報告

福島市から南の二本松市の東和というところで農業をしている。コメ、トマト、高原大根、冬はモチ、弁当などを加工場をもって複合系でやっている。原発から約50km弱という地域。計画的避難地域のけやきやという地区は隣町。

平成の大合併で一市三町が合併して現在の二本松市という6万人の市になった。東和というところはそもそも人口7000人で7つの小学校があって、その小学校も3年前に1つに統合されてしまったが、そうした中山間地だ

った。

原発が来るまでは浪江にしる双葉にしる畜産が非常に盛んだった。かつてはこの家でもウシや羊、カイコを飼い、たばこをやり、棚田でコメを作るといふ地帯だった。だから、テレビなどで避難して誰もいないところをウシが走り回っているのを見ることあるが、原発 50km 圏内はそういう、養蚕、葉たばこ、畜産が非常に盛んだった。

ところが 1980 年代からの農産物輸入自由化で牛肉、オレンジから生糸も輸入される。たばこも民営化されるようになるということで価格は暴落し、耕作放棄地が非常に多くなった。

今、全国の耕作放棄地は 40 万 ha、これは埼玉県の面積。福島県では 2 万 ha。

そのように荒れた畑を何とかしたい、もう一度、子どもたちに原風景の残るふるさとを残していきたい。そんな思いで、東和地域で、合併前に農家と商店街で NPO 法人を立ち上げ、道の駅を運営しながら進めてきてやっと軌道に乗ってきたところだった。桑の葉を健康食品としてよみがえらせたりなどの取り組みをここ 10 年以上やってきた。

私は有機農業を始めて 30 年になる。大学を終えて帰ってきてから始めた。できるだけ農薬を減らしてやりたい、中山間地なので日照時間が少ない、地温を上げたい、雑草を押さえたい、そのためには深水管理ということで棚田の水を溜めるということで 15 年ぐらいやったときだった。

「田んぼのとんぼ」という詩を書いた。

田んぼのとんぼ

6月の終わりの なまあたか初夏の朝／僕は棚田に水を引くため あぜ道をいく すると、／稲の葉から ヒラヒラと 羽化したとんぼが飛び立った／1つや2つではない 20羽、50羽、いやいやもっと飛び立った／ヒラヒラ ヒラヒラ やわらかな羽が 朝陽に輝き銀色に光っている／僕はあぜ道に立ちつくす なんて美しいだろう／稲の葉と葉の間には くもが糸をはる タガメがいる カマ

キリがいる／カエルが足下で飛びはねる 田んぼは小さな生命の世界／暑い夏に里山に上り 自由に空を飛ぶ／稲穂が黄金になるころ とんぼはつがいふるさとに帰ってくる／穂波に小川に産卵をする／田んぼから飛んだので とんぼと言うのだ

○良い堆肥づくり＝原発事故前

田を始めたときは 1 俵でも多くとりたい、コストも下げたいという計算で考えていたが、この光景を見たとき、自分のやっている仕事はコメ作りだけではないんだということを感じた。こういう命を守っている。この様子も子どもたちに伝えようと思った。

地域の有機農業のベースが土作りだとしたら良い堆肥を作ろうと思った。しかし、良い堆肥はない。完熟した微生物のすみかとなる堆肥を作ろうと、牧場と農家と企業があつまり、出資して堆肥づくりに入った。

500 頭の牛糞に籾殻、食品の残渣、カット野菜、銚節やコンブの絞ったかす、そば殻やパンくずなど 14 種類もの食品残渣を発酵させたものだった。2 ヶ月熟成させて半年かけて完熟の堆肥を作った。

12 年前に初めて作った堆肥センターの紹介。

東和地区ではこの堆肥をつかってコメも野菜も果物も作っている。このようなセンターを全国に作る必要があるのではないかと私は考えている。食品、残飯を資源化するというのが大事だということで取り組んできた。

その中で去年の原発事故だったから非常に悔しい思いをしている。

○原発事故 農家の苦しみ

私の地区はちょっと風向きが変われば避難せざるを得なかったところ。私の町には浪江町から 3 月 15 日に 3000 人が一気に避難してきた。そのうち、1500 人を 7 つの小学校の空き教室や体育館や公民館に受け入れた。このような形で避難している。浪江は今でも 20、30 マイクロ。

国と東電は早急に仮の住宅と仮の農地を確

保しないといけない。いつまでも仮設にはいられないという状況だと思う。

これは飯館の仲間でコープ福島にブロッコリーなどを出していた高橋さん。彼も耕したいが耕せない。現在、福島市内のアパートに住んでいるがまだ帰れない。100万円の保証金をもらったりしているが、お金をもらうと人間は弱くなり、怖いということで彼は農地を借りて農業を始めた。

実はキャベツの出荷制限の出た昨年3月14日、有機農家が自殺した日だ。ショックだった。その次は酪農家も自殺。この月にかなりの自殺者が出た。12月に私の二本松市でも果樹農家が自殺している。余り報道されていないが、やまきわ地区では墓参りにいって夫が自殺している。

わたし達はその中で、たまたま土壌基準値の5000ベクレルを超えてなかったのでコメ作りを始められた。

これは昨年の様子。今年もこんな感じ。

これは道の駅の4月16日の生産者会議の様子。一体何をすればいいのかを話し合った。1ヶ月間、みんな放射能におびえていて外へ出なかった。しかし、みんなで集まると元気になった。顔を見合うのは大事だということを感じた。

○子育てもコメ作りも同じ 小学生とのコメ作り=事故前

3年前、大学を終わって就農している私の娘。実は、娘が小1のとき、地元の小学校70人のPTAの役員をやっていた。当時、生活科ができてコメ作りをやるということになった。その後、5年生の総合学習でもコメ作りをやって、15年間田んぼの先生をやったそのときの記録。

1年目は私の作った苗で田植えをしたが、その後は種籾選びから保温雪中苗代を作り、田植えをやった。先生たちにも教え、15年間、子どもたちとやった。

代掻きも人間代掻きをやった(笑い)。こんなにどろんこになって、そのあとまっすぐブルに入らせた。最初は保護者からけがをし

たらどうするの?破傷風になったらどうするの?へびが出たらどうするんだという心配も出ていたが2年目、3年目になったら地域のじいちゃんやばあちゃんも田植えに来たりした。そのとき作ったのが親子すくすく委員会、そのようにして15年間やってきた。

そこでもたくさん学んだ。子どもたちは水も泥も好きだ。この時期に子どもたちに発達に応じた体験が大事だとわかった。

農業も教育も同じだと思った。一人一人の子どもに光を当てる。一株一株のイネにも光を当てる。だから40人学級ではなく30人学級、25人学級。イネも疎植。なるべく株間を開けて光が当たる様に。そして、持っている力を引き出すのが農家の仕事だったり、先生の仕事だと思った。

だから、こういうどろんこ遊びをさせることのできる福島をもう一回取り戻さなければいけないと、今、思っている。

○農地の放射能を減らす

有機農業学会というのがある。茨城大学、新潟大学、東京農工大、横浜国大の先生方と協同で調査することになった。

これは道の駅に3台ある放射能測定機。核種まで測れるが、昨年の7月から全ての野菜を測っている。測らなければ直売場へは出せない様にしている。これはベクレルモニターという機械で自然の放射性カリウムまで出してしまう。だから高く出る。ベラルーシ製のが一番性能がいいことがわかってきた。

昨年の7月、草の上で1.5マイクロシーベルトあったがそれを3回堆肥を入れて耕すと0.6、0.7に下がることがわかった。私は考えた。飯館村など草ぼうぼうでは駄目だ。草を刈る、除去する、耕す、これによって農地の被曝を減らす。とにかく耕すことをしないといけないと直感したのが去年の7月。

その後、9月になってプラウ耕で反転耕起した。表面の5cmにセシウムがあるのでそれを土に埋めてしまおうと、20~25cmプラウ耕をやった。そしたら表面5cmに1万ベクレルある。これは学校のグラウンドも。3

回、15 cmを耕すと 5000 ベクレル以下に下がる。さらにプラウ耕をするとセシウムはどこへ行っただというくらいに下がる。

私たちは表面を剥ぐという除染ではなく(表土を剥ぐという除染では、仮置き場もなく経済的にも物理的にも大変、またそれではいつになったら農業ができるかわからない)、表面を耕し、土中に埋めるということでセシウムを固定化させ、農業を続けることが大事だと考えている。これが大学の先生たちと検討してわかったことだ。

これが私の地域で 500 ベクレルが出て、大騒ぎした田んぼ。山合いの水がまともに田んぼに入ってくる。しかも、排水が悪く地力がない。イネ株が小さい。こういう所で放射能が出やすいことがわかった。

要するに山の汚染が深刻。大雨ごとに流れ出る水がまともに田んぼに入る。それがまっすぐイネに吸われる。

私の地域でも新潟大の先生たちと実態調査をする中で水の入るところが高くて水の出るところが低い。つまり、セシウムは土壌に固定化されることがわかってきた。

○ゼオライトをふれという指示

二本松市では 100 ~ 200 ベクレルが何カ所か出たので、ゼオライトをふりなさいという指示が出た。300kg ふりなさいという指示が大変。平均年齢 65 歳のおじいちゃん、おばあちゃんに 300kg をふれというのは大変なこと。科学的なデータもないのに。じつはこれは、環境庁からお金が出ている。農水省の考えでなく、内部被曝をなくすために環境省が思いついてやったこと。それがコメ作りにとってどうなのかという検証が何もされないままに。二本松市ではサンプル代、機械代などで 8 億円が費やされた。それで、二本松市では 3 割以上、コメを作らない農家がふえてしまった。

新潟大の研究者と実験田を設けてゼオライトをふったところとふらないところ、堆肥を入れたところ、ボカシ肥料をまいたところといろいろやってみた。

これは消費者が私の田を見に来ているとこ

ろ、消費者と生産者が協力することはすごく大事だと考えている。

○持続可能な社会は農林漁業が支えてきた食料、エネルギーの自給へ今が転換点

この 6 月、ブラジルで国連環境会議が行われる。そこへ私は行くことになったが持続可能な社会がテーマだが。そもそも持続可能な社会は誰が作ってきたのか、私は思う。それは 30 年、50 年後のために山に木を植えてきた林業家であり、豊かな山からの豊かな水を使って農地や田んぼを作ってきた農家であり、ミネラル豊富な水の猟場で働く漁民なんだと。農林漁業が持続可能な社会をつくっている。このことをしっかり伝えないと行けないと思っている。

汚染されて、初めて林業・農業・漁業の果たす役割が本当に大事だとわかってきた。

落ち葉が使えるのか、魚かす、油かすが使えるのか、すべて今、検証しなければ使えない。

こういう農業の役割を消費者にももちろん学校の先生方にも伝えていきたい。子どもたちにも伝えなくてはいけない。農業の果たす役割は、ただ単に、野菜やコメを作っているだけではないんだということを汚染されて初めて私は感じている。

これは菜の花。セシウムを吸わせながら菜種油を絞りたいと。道の駅に菜種油を絞る機械が入ったので。

食料だけでなくエネルギーも自給していく、私は今、その転換点だと思っている。今、変えなかったらいつ変えるのかという転換点にしていきたい。

子どもたちにこの事実をしっかり伝えながらふるさとを再生していきたいと思っている。(拍手)

<このあと大熊町を被曝で追われた渡部さんのビデオを視聴>

《 質疑応答 》

Q1: ヒマワリの写真があったがヒマワリを使って何かとりくんだのか?

A1: セシウムは油にはとけないのでヒマワリの油を絞っている。除染の意味もあった。一般的には効果ないと言われているが、根の部分には 1000 ベクレルあったから、一概に効果がないとはいえないのではないか。もっと検証する必要があるので今年もヒマワリをまいている。

ただ、茎と葉が大きいのでその処分をどうするか、次から次へと問題は出ている。

Q2: ND (不検出) について

A2: 今では 10 ベクレル以下が ND となっているが、さっき説明した測定機は 1, 2 ベクレルまで測れる。現在の測定は 30 分でやっているが 1 時間、2 時間置けばもっと正確に出る。しかし、長時間では、たくさんの検体の測定ができなくなるので現在の状態だ。

私は 1 ベクレルまで表示すべきだと言っている。また、そのように測定したデータをもって消費者に向き合っている。

去年の福島県産の玄米の 98.5 % は 50 ベクレル以下で、500 ベクレル出たのはわずか 0.2 % だった。しかしマスコミがあのようにセンセーショナルに報道するので、福島県の米は全部、農協の倉庫や有機農家の納屋に眠っている。

私は今の福島県の農産物は全部が汚染されているのではないと考えている。今年になって、キュウリやナスが市場に出てきているがほとんどゼロ。去年だって 10 か 20 だった。つまりセシウムは土に全部固定されて農産物に移行しないことがわかってきた。

ところが福島県産は全部、汚染されているとして次から次へと問題が起きている。が、けっしてそうではない。しっかり測定して、ゼロベクレルのものは学校給食に入れて欲しい。ゼロベクレルでも食べませんとなったら福島県の農家のものはどこへ行ったらいいんですか。

京都でのシンポジウムに参加したとき、同じパネラーに若い福島のお母さんがいた。この話をしたら自分たちの所へはそのような情

報は、全然伝わってこないという。避難しているお母さん方に福島県の農家の様子やコメの様子は伝わっていない。やっぱり、伝えなければいけないと思った。

私たちと若いお母さん方のコミュニケーションを交わす場が必要だと思っている。

シンポジウム II 放射能汚染と市民生活(3)

放射能被害と福島県の教育課題
佐原成典さん
(二本松市 元公立小学校)

前日から今日までのシンポジウムで明らかになっているので要項の 1 と 2 について (被害の話) はカットする。

<生活と健康、学習を巡る運動が起きた>

・学習会 地域でも保育園でも、小学校の PTA の講演会でも実施されてきた。その中で出てきている課題

○除染の現状と課題

・学校や公共施設の除染は進んでいるが地域の除染が課題。大変なのは除染したものの処理。地表から 5 cm の土と芝生は全部はぎ取る。植木も切り、丸裸にするのが基本。しかし、切ったものの処理ができない。地域ごとに仮置き場を作ることで進んでいるが、どこに作るかが問題になっている。私の住む二本松市の地区では山林の土地の所有者が一度は OK したのにその後、家族が反対して駄目になった。その後、やっと仮置き場が決まり除染も進んだ。

通学路を中心にやったが、地区総出で一日がかりでやった。除染したものは大きな 1 トンバックというものに入れて山間の指定地に運び、下にシートを敷いた坑に埋め、土を入れた大きな袋で遮蔽するというやり方だった。

ただ、この方法もうまく進まない大きな理由は仮置き場の次の、国のいう中間貯蔵施設が決まっていないからだ。

○「学習環境を整える」では、学校には扇風

機やエアコンが入ってきている。

○18歳以下の医療費の無料化を福島県に要望してきたが、それはできないということで現在、県独自で基金をもとに実施する方向で進んでいる。

○「被曝線量の把握」について

甲状腺の被曝線量検査は、浜通り地区の子どもたち中心に進められている。内部被曝検査については浜通り、中通りの子どもを中心に進んできている。積算線量の検査もされてきている。

○食品の放射線量については、今やろうとしているのはベルトコンベア式の検査機械を米の出荷所に置こうというもの。

<教育上の課題>

課題を要項に列挙した。

○止まらない子どもの県外避難

今でも1万6千人以上の子どもが県外へ避難していて止まらない。増えているのは南相馬市だけで子どもたちが戻ってきているが他は減少し続けている。私が担任した6年生30人のうち2人が避難。1人は昨年9月に、母親の実家の北海道へ。もう一人は放射能の学習会に熱心に参加した親だが、その後の除染が進まない状況を見て、父親の転勤に合わせて家族で避難。3月31付けで子どもも転出したが、高校生になったお姉さんの学校選択が大変だった。

○がん以外の病気の件では 研究者の山下さんは昨日から問題になっているが100ミリシーベルト以下では発がんのデータはないといっているが、他の病気にならないのかという不安を母親は持っている。説明が足りない。そうした中で子どもの数が減るのはあたりまえ。

○原発による失業が保護者、子どもに暗い影を落としている

仮設住宅に避難して保証金も出ている人も働くところがないと不安になる。自分の生き甲斐を求めて、パチンコや飲み屋に向かってしまうものも出てきている。そうした保護者の不安が子どもにも移ってきている。

学校まで親と一緒に来るが、そこから、親となかなか離れられない。学校へ来てはすぐ帰りたいがるという子どももいる。低学年の子どもに見られる傾向だ。

○元の地域に戻れないのではないかと不安が大きくなっている。子どもも保護者も同じ。戻れないなら戻れないとはっきり話して欲しいという声も。子どもの場合は友達を強く求めるが、特に思春期を迎える子どもの場合は友達関係を密にしたいという気持ちを持っていて、かかわり方が過多になっていると思うこともある。

○高校の問題は深刻

浜通りにある高校（浪江高校や双葉高校）へは全く、通えないのでサテライトという形で、どこかの高校に出先の教室を作り、授業するという形をとっている。昨年は仮設住宅が県内に散らばっていたのでサテライト校もいくつかに分かれていた。例えば、浪江高校は二本松に一つ、会津に一つ、いわきに一つというようにあったが、現在は各高校が一つにまとめられてきている。そのため、今度は通学できなくなってしまう生徒が出てきて寄宿生活を送らざるを得なくなる子が出てくる。高校選択の問題も子どもたちには大きな負担になってきている。

○原発事故後も「学力向上」に取り組む様に指示を出している県教委

○文科省、県教委は放射線は怖くないことを内容とした教育をやるように指示

<文科省の副読本について>

県民教育センターの依頼に基づいて執筆した生原稿（未定稿）にそって報告する。

○副読本は以下の点でふさわしくない

・副読本は原発推進の立場である。副読本の目次を見ると放射能は役に立っているとしか書いてない。これは福島県の人にとっては許し難いこと

・内容的にも100ミリシーベルト以下は安全としている問題がある。

・原発の問題 原発では中性子をウランにぶつけるということで、ウランから次々と新し

い物質ができるがそのほとんどが放射能を持っている。その過程で放射性物質が高濃度で作られていくことが書かれていないが、大きな問題だ。私は理科で扱う物質はすべて毒物だという前提で教えているが、人工的に作られた物質も毒物として捉えて授業している。その毒物である放射性物質を多量に作り出す原発が安全であるはずがないという前提に立たないこの副読本は大問題だと思っている。

○体内に放射性物質が入らないようにするにはどうするかが抜けている。

・副読本ではマスクをするとか、決められた量より放射線が多く入ったりした水や食べ物を摂取しないようにとっているが、このままでは間違い。放射性物質は小さいのでマスクをすり抜ける。わたし達が主張していたのは土ホコリを吸わないためだった。

・飲み物食べ物について、決められた量より少なければよいとっているが誰がこの値を決めるのかの問題が触れられていない。イラストは何か楽しげだ。これでは子どもたちは避難しない。

・教師用指導書には年間 20 ミリシーベルトまでは安全と書いてある資料が載っている。そのことを教えろとっている様に読める。

・放射線のリスクとベネフィット（便益）の項目を設けている。リスクより、利便性があれば使っても良いとっている。医学ではそのようにされてきたが、原発でもそのように考えるのは問題だと思う。健康と経済性を天秤にかけられるものではない。

・県教委の通達については省略する。

＜これからの放射線教育は原発事故を前提に行うべき＞

これまで福島県の教員の多くは、毎年行われる原発 PR センターの主催する研究会に参加してきた。そこで原発は安全だという認識を植え付けられてきたと思う。理科の教員も多かった。これは自分にとっても反省点。原発は二酸化炭素を出さずに地球温暖化にとって有効とした説明に乗せられたかたち。

○「放射線教育の基本的立場は原子力発電はゼロにする」を前提にする

これをきちんとしないと教育的には問題。しかし、福島県教委は原発の是非については授業の中ではやるなど指示している、特に反対とってはいけないとも。福島県では福島県教委だけが異質。

○放射線は毒物として扱う

○放射線は測ることによってわかる だから測ろうと進めるべき（特に小学校では）。そのために測定機を国に手当てしてもらおう。

○エネルギーは環境にやさしい循環型のものにしていくということを基本に。

○放射線・放射線物質の学習は小学生には難しい。原子の学習をする中学生以上で。

＜放射線教育をこのようにやりたい いくつかの自分の案＞

○原発事故の実態と放射能汚染の状況を伝える。

○放射能とは

・まず放射線は身体に害があるものということ

・見えないが測れば見える ということ教える。

線量計を近づけたときと遠ざけたときでは値が変わる。遠ざかれば、大丈夫だよということがわかる。測って地図を作っておく必要がある。

小学校では今年の今頃は、外で線量の高いところでは 5（マイクロシーベルト）、2~3 は普通だった。除染した後でも側溝の「ます溜め」では 20 マイクロくらいはすぐ出る。滑り台の着地部分、雨樋は高い。これらを地図に落として、子どもたちにもわかるようにする。

コンクリート校舎の中は低いので、家の中は少ないということがわかる。

○放射線の身体への影響を知る

この部分はお話だけになってしまうが放射線は細胞の遺伝子を傷つけること。病気を治すことにも使われるが、その部位だけに限られているし、まわりの細胞を傷つけても細胞自体に修復機能があるのでずっと浴び続けなければ回復することも話した。これで子どもたちは安心もした。

定期的な健康診断が大事ということで、全員が内部被曝検査を受けた。その結果も家庭に配布されている。検査結果については「大事な記録だから、毎年の記録をきちんと持っているように」と伝えた。

○「電力は無駄をなくし、環境に優しい太陽エネルギー由来のものに」は理科で進められていると思う。

まだいくつか不足もあるが、以上の内容でやっていけないのではないかと考えている。他にも環境学会や、昨日のシンポで出た福島大学の試案も参考にしてやっていければよいと思っている。

《 質疑応答 》

Q1：内部被曝検査結果の内容と通知の仕方はどうなっているのか

A1：結果は個人ごとに知らされる。中身は「現在のところ異常ありません」など。市へは個人ごとのデータがいてデータにも高い低い個人差があるので、積算線量の多い子については、別に調査している。そのことによって線量の高い地域も新たに発見されたりしている。二本松市のマンションの汚染はそうようにして見つかった。

Q2：思春期の子どもたちが友達を求めているという話の内容をもう少し解説して欲しい。

A2：一つの避難所にいた子どもたちが分かれていくつかの仮設住宅に入ったが、そのとき学校も転校した。私の所へ来た子は福島にいた子で、最初は友達ができずに不安を訴えた。友達ができる様にいろいろと配慮したが、グループに入ると、特別に結びつきの強いグループを作りたがる傾向が見られた。

Q3：今、原発がなくなって日本の電力はまかなえるのか。

A3：今は再稼働の問題が大きな課題になっているが、全体の量から言えば十分にまかなえると資料などにはデータとしてある。個々の電力会社によってはいくつかは危ないという様な報道もされているが、全体としては施設として間に合う量があると言われている。関西電力の場合は稼働していない火力発電所も

多い。電力会社は事情があると説明している。例えば古いから設備投資しなければ使えないとか、燃料価格の高騰などだ。この事情があるからとあえて動かすのを制限している様に見える。

もちろん、節電ということも行きわたっているのだから、あとは企業との調整が残っているが、それをきちんとすれば乗り切れると考えている。

シンポジウム II 放射能汚染と市民生活(4)

グローバルな視点から
福島の教育を考える
三浦浩喜さん
(福島大学人間発達文化学類)

これまでの報告とは質の異なる報告であることを了承して欲しい。OECDと福島大学が協同して復興プロジェクトを行っている。その中身について報告しながら福島の教育の未来について考えていきたい。

1. OECD東北スクール

<そもそもなぜOECDなのか>

3月11日の大震災が起きて、3月24日にはOECD教育局から諸外国の教育研究対応を発表して、4月、アンヘル事務総長が来日し、復興支援を表明した。11月にはOECD教育局のパーバリシンガーヌさんと文科大臣が会って復興支援の約束をしている。2月には日本での震災事例を入れたビデオシリーズを紹介している。

私はOECDの動きはとらえていなかった。学生たちのボランティアに埋没していた。

4月から8月までは他から認知されることなく、大学が独力でボランティアをやっていた。6月頃、自分たちのやっていることをHPをつくり、発信し始めたら6月下旬に文科省からメールが届き「HPを見た。中身について詳しく教えてくれ」ということだった。初等中等教育局の大井さん(福島県出身で福島の教

育の被災状況を丁寧に調べていた人だが)の目にとまった。それから、文科省と福島大学のつながりがスタートした。

11月にバーバラさんが来たときに、その下の教育訓練課長のデボラさんが福島大学にもぜひ協力して欲しいということではじまった。〈そもそもOECD東北スクールって何なのか〉

あくまでもOECDが介入する教育プロジェクト。子どもたちが主体性を発揮するためのプロジェクト学習を実施するんだという。自分たちに与えられるプロジェクトというのは自分たちの力で東北地方の魅力を世界に向けてPRするという国際的なイベントを実行するというとてつもない大きな課題。

復興は長期にわたるので1回完結型のイベントではなく、長期にわたって復興支援の担い手として子どもたちを育てていくというOECDのコンピテンシーを基本に据えた子どもたちの教育というものを、これから3年間にわたって行っていくんだということである。

○未来、地域、復興を考える

あとで子どもたちの様子を紹介するが、大人のレベルでは地域という場合、行政だったら自分の町だけとか、企業の場合は自分の企業だけを想定して行動するのだが、もっと国とか世界的な関係を含めて前へ動かすというように、子どもたちは純粋に考えることができる。それを東北スクールの中で生かしていきたいということ

○具体的なプロジェクトの中身

子どもたちに与えられた使命は2014年の9月にパリで東北の魅力をアピールする企画を実行すること。場所はOECDの本部がパリの凱旋門の南にあるがその中庭を予定している。

東北スクールに協力してくれているガットさんという人は、パリのシャンゼリゼ大通りを借り切って何度もイベントを開いている人で、もしかしたら子どもたちのイベントがシャンゼリゼ大通りのど真ん中で行われる可能性も十分ある。

フランスへ渡航する子どもたちだが福島、

宮城、岩手の被災地の子ども120人ぐらいになる。しかし、渡航に必要なお金がない。その金は子どもたちが稼ぐことになる。東北スクールでやろうとしていることを企業、行政や文科省、政府に子どもたち自身が支援を訴えることになる。すでに大きな企業に子どもたちは手紙を書いている。文部科学大臣や古川副大臣にも支援をお願いしている。文部科学大臣は子どもたちに対して支援を約束している。

イベントの内容はまだ全くの白紙でこれから作っていく。3月に3泊4日のスプリングスクールを行ったが、その中では簡単なアイデアは出ているが、これからその中身を詰めていくという段階である。

○巨大なプロジェクトだが、それなりの組織や仕組みが必要で東北3県、文科省あるいは全国各地の企業や様々な教育機関の協力の下に成り立っている。アドバイザーリボードは大学の知識人とか企業、教育行政、現場の先生も含めて全体の方針を作っていく中心メンバー。

エンターメントパートナーというのは東北被災地だけではなく、日本全国の被災地を応援したい人がいてスプリングスクールには東大付属高の7~8人、奈良女子大付属高の2,3人が入っていろいろな形で応援してもらっている。そして、東北スクールの参加者自身ということで100人~120人ぐらいを考えている。基本的に中高生を考えているが、集まってきたのは4/5は中学生で1/5は高校生だった。これから3年間にわたってOECDの東北スクールに参加していろいろな力を身につけ、2年後にパリに行き、東北をアピールすることとなる

当然ながら中学から高校へ行く難しいときなのでメンバーに出入りはあると思うが、できる限り固定したメンバーで東北復興にかかわるパイロット事業を行いたい。

○東北スクールの基本的な方針

・一つはPISAの枠組みとなったOECDのコンピテンシーに基づくカリキュラムを作っていくということ

・それから、日本での震災ではあるが、世界各地で様々な災害があり、そこから復興していく上で役に立った教育の事例などがたくさんあり、OECDはそうした事例をたくさん集めているので今回のOECDの中に入れていくという方針。学際的なアプローチとして、あくまでも教育的な活動であって単なるイベントではないということで、国内外の教育学者が集まってカリキュラムを作ってきた。

・国際性ということでは、現在、東北の被災地では国内外から様々な支援したいという申し出が外部から来ているが自分たちでできるからと断っている現状もある。もっと国際的にオープンにして様々な力が復興の力になるようなベースを作りたいというねらいもある。

・「イニシアティブからシステムへ」ではすでに申し上げたが、お金があるからどこかへ連れて行って子どもたちを勉強させてくるというようなものではない。震災復興というのは長い時間かけて行なわざるを得ないので、今回、3年間かけて東北スクールをとりあえず成功させる。そして、これをできるだけ一般化して普通の学校で実施できるような新しい教育の仕組みを作っていきたいという高い志を持っていて、この部分については文科省もかなり本腰を入れて構えている。

・自助努力の継続性について

私も学生たちとボランティアをして現地をずっと歩いてきたが、被災者が支援されるのに慣れてしまって自分で立ち上がろうとする意欲が湧いてこないという実態もある。その問題を子どもたちの目で見えさせていきたい。東北スクールプロジェクトがどのように役に立つかも検証したい。

・個と個のつながり

被災地域の中で子どもたちはつながっているが、たとえば原発で被災した子どもは他県の津波で被災した子どもの様子はほとんどわからない。つながっていない。被災者がインターローカルに地域間でつながることでこれまでにないつながりを作っていくという意味合いもある。

・主な流れだが 2012 年から 2014 年というこ

とで、今年の 3 月にスプリングスクールを行った。次に今年の 7 月 30 日からサマースクールを行い、来年、再来年もスプリングスクール、サマースクールというように行い、最後にパリでのイベントということになる。

問題はイベント的に実施するスプリングスクールとサマースクールの間をちゃんとつなげなければいけないということで、現在参加している子どもたちが地域でまとまってウィークエンドスクールというか、学校や公民館に集まってOECD東北スクールの宿題をやったりするなど現在展開中。もちろん、地域によってやりかたはバラバラでうまくやっているとところもあれば、うまくいかないところもある。

2. スプリングスクール in いわき <写真での報告>

・スプリングスクールの様子 子どもたちが 3 県から 80 人集まった。そのオープニングの部分。グリア事務総長がメッセージを送るところ。

・ここからワークショップ。

8 つぐらいのワークショップがあった。池上彰さんもOECD東北スクールに賛同してくれた。子どもたち 80 人全員に自己紹介させたり、復旧と復興はどう違うかななどをレクチャーしてくれた。

・金沢工業大学の三谷先生。発想力などで有名なユニークな講義をする先生で大変おもしろく、参加したほぼ全ての子が一番印象に残ったワークショップだったといっていた。

こうした教育も通常の義務教育の中にも必要ではないかなと思った。

子どもたちは本当に真剣。生徒会長レベルの子が多かったということもあるが、中には女川や釜石で親を失った子も相当入っている。

・私も一つだけワークショップを担当したが、この 1 年間でどう過ごしてきたかを絵で表すワークショップをした。そして、それをもとにしてお互いに自己紹介をするということさせたが、子どもたちは気丈に自分たちの受けた被災を話してくれた。子どもたちはお互いにびっくりしたといっていた。

・様々なワークショップが入っていて、これはシンガポールのエドモンドさん、小学校の校長先生のもの。これは前の文部科学副大臣の鈴木寛さんですが、挨拶をお願いしたら 30 分くらい講義していた。

・これは中日に撮った集合写真。

・これは自分のシルエットをビニールの上で作って、それを夏に全部貼り合わせて一つのドームにする。夢の膨らむ表現活動で子どもたちも、のっていた。

・3 日目、ガットさんのワークショップ。ガットさんは世界の様々なメディア、政府にも太いパイプを持っているメディアプロデューサー。子どもたちに「自分が責任をもってパリに連れて行く」と言ってくれている。

・パリについて説明してもらったり、フランスの日本人学校の子どもたちがスカイプで応援メッセージをくれているところ。

・自分たち 80 人のチームに名前を付けようということで最終的には「和」(「輪」?) という名前がついた。後半、大きな象徴になっていくのかなと思う。「和」と決まったとき、皆で「わっ」と叫んだときの光景で印象的で感動的だった。

・夜はやっぱり、中学生なので屈託なく楽しみ、喜んでいた。

・4 日目、早大ビジネススクールの内田先生に企業戦略というものを教わる。通常、自分なんかはあえて、避けて通って来たところがある。しかし、このプロジェクトを成功させるにはお金が必要。我々もいろいろな形で資金調達しているが、それでも足りなくて子どもたち自身が資金調達を行う。企業に手紙を書いて自分たちの活動を支援してもらおう。自分たちでロゴマークの様なものをTシャツにプリントしてユニクロのルートで販売してもらおうとか、自分たちの活動を写真や文でまとめ、大手出版社に入ってもらって本にして売るなど、そのような様々な形で自分たちでお金をかせぐということを体験させる。その中で、現代の中で生き抜く力を身につけさせたいというのがOECDの中には強くある。

子どもたちもすごく、内田先生の講義の

中で、中学生も質問をしたり、「僕はそう思いません」など言っている。中学生ってすごいなあと思ったりした。

・4 日目の講義を受けて最終的にパリでどのようなイベントをするのかの素案の素案のようなものをグループごとに考える。パソコンやアイパッドなどあらゆる機器を子どもたちは臆することなく使って議論しまとめ上げている。

・企業の社長も来ていて、これは丸山海苔店の社長だと思うが子どもたちの姿に感動してその場で支援を約束してくれた。

・最終日、いわき市の海浜子ども家で行ったが、近くの保護者だけが、その人たちを招いてプレゼンテーションを行った。半日で作ったとは思えない完成度の高いもので子どもたちの思いがひしひしと伝わるプレゼンテーションだった。パリで発表するには素朴すぎてまだまだだったが。

子どもたちの思いが一つになったのは大きな成果だったかなと思う。

・最後に記念撮影をした。

・私は、最後に子どもたちに修了証書をあげたが、修了証書のイラストは東北の海岸線。この海岸線の上で 2 万人の人が命を落とした。しかし、それ以上の人がこの上で命を救われて、がんばらなきゃと立ち上がった場所でもある。

絶望の境界線から希望の境界線へというテーマで作ったシンボルだが、これが 7 月からパリの市庁舎で、東北復興ビジョン展という展示会が行われるが、そこに、この東北スクールのブースを設けてもらうことになっている。主催者がこのロゴマークを気に入られて、使わせてくれということで別な形で展示することになっている。本職が美術なので本職真利に尽きるという事(笑)。以上で終わります。

《 質疑応答 》

Q1: 夢のある話で感動したが、一方で、宮城もそうだが福島県教委のように学力、学力とやっている。もう一方で、この報告のような動きがある。県教委などの旧来の学力型教育

者の反応はどうだったのか？

A1：復興支援にかかわって、様々な形で県とか市町村教委、文科省と接触してきた。県教委の動きは非常に鈍くて、昨日、県教委の人と席を並べてパネルディスカッションしていたが。

ここに県教委の今年度の教育復興のプランがあるが、これが教育復興なのかと疑問だ。「学力向上推進支援事業、理数教育充実事業など」と。これ自体を否定しようとは思わないが、今、これを言うべきタイミングなのかと、強く思う。むしろ、文科省やOECDの方がずっと現地のことをよく理解して心配している。

文科省も1枚岩ではなく局によって態度は違うが少なくとも、県教委にはどのような働きかけをして協力してもらったらいいか考えている段階である。

Q2：文科省も色々あるというところは？

A2：復興教育の立役者は鈴木寛さんだと思う。彼は文科省の中でも教育の中身について精通している方。この方は教員養成6年制をプランニングしている人で良くも悪くも教育改革に積極的で、そのための様々な条件を各地で作っている。その鈴木寛さんの影響が強いのが生涯学習政策局で、この局が今回の東日本大震災の復興教育の推進母体だ。被災地の市町村教委と連絡をとったり、被災情報などを直接集めている。初等中等局の中にもその流れに賛同する人もいてかなり自由な立場で福島、宮城、岩手を歩いている方もいる。

この間、文科省の官僚と話をしてきたが今回の震災復興を教育改革のバネにしようという、そういう政治的な意図もある。

OECDのスプリングスクールの報告書は総理大臣にまで行っている。大成功だったということで文科省はこれを一般の学校に普及できる仕組みをつくるとも言っている。OECDも推進する体制を強めるとも言っている。

Q3：地域復興の担い手育成プログラムの図では出口がパリになっているが、その趣旨を知って集まっている子どもたちだからなのかも知れないが、自分たちが地域復興の担い手に

なることとパリへ行くことの間について、学習の始まりに中学生や高校生がどういう討議や討論をしたのか教えてほしい。

A3：お互いの立場や、被災地の中でどういう風にして今日まで過ごしてきたのかということで、理解するところから始まって、多分、子どもたちの間でも、私の中でも地域復興とパリでイベントをすることが必ずしも一つになっているわけではない。

ただ、4泊5日の中で子どもたちが強く心に刻んだのは、自分たちは世界に対してメッセージを発しなければならぬこと、このことを参加した子どもたちは本気で考えていると思う。実際に、このプロジェクトの中で子どもたちが発想したのは感謝の意を込めて日本のサクラをOECDの中庭に植えるものだった。が、いろいろ調べてみるとEUでは外来の植物は一切持ち込みを禁止している。どんな例外も認められないということがあとからわかって、今回の植樹は無理だとわかった。しかし、子どもたちが考えたことを国際レベルで…これは政府間でのやりとりだった。それくらい本気で子どもたちの考え方を大切にしたいという動きになっている。私も正直、驚いている。これが、私の知っている文科省か。もちろん、ひとつは打ち上げ花火的なところもあるとは思いますが、それなりに復興教育については本気で考えている。

Q4：国内にまだアピールできていない状況で、なぜそれを超えて世界なのか。世界にアピールするためには異文化理解も必要。それにも取り組んでいるのか？

感想としては東北と世界をつなぐということで現状を伝えれば、津波であればスマトラとかチリもあるし、原発であればチェルノブイリもあるので、それを全部つないだら巨大なネットワークになるのではないかと思った。

A4：言われることはもっともだと思う。偶然だが、今日のシンポジストは佐原さんが二本松市で菅野さんが東和で、私は旧岩城町出身でほとんど同じ所から出ている、非常にローカルな顔ぶれ(笑)。

私は福島県生まれで福島県育ちで現在福島大で働いている。ほとんど福島県以外へ出たことがない。福島県以外のことは何も知らないというローカルな人間で（笑い）、そのローカルな人間が、なぜこのような国際的なプロジェクトに携われるのか自分でもよくわからないが、ただ、今回根っこにあるのは、さきほど言ったOECDのコンピテンシーだ。国際的にどのようにつながっていくのかという資質を子どもたちの中に据えていかなければならないというある種の社会的な実験。

地域やローカルなことであれば地域がやれば良いわけである。そこにOECDが出てくる必要はない。もちろん、地域復興、教育復興というのはOECDだけがやっているわけではなくて、市町村レベルでは子どもたちをドイツやハワイへ連れて行ったりと、国外へ連れて行くのはやってきていた。それはそれでやっていけばいいが、今回、我々が考えているのはあくまでも県とか市町村に限定されない東北というものを子どもたちが全体的に考えていく、そのために世界に向けて発信することを一つのテコにして、子どもたちの意欲を高めていくということになるのでしょうか。

とにかくOECDが介在しているのが一番大きな要因だと思う。

シンポジウムⅡ全体への質問と討論

Q1：大波さんへの質問 食材の放射線量のはかり方だが、近くに測る場所があって、無料で測ってもらえるようなシステムができていいのか。また、毎日測っているのか。

A1：さくら南保育園ではしのお支所へ運んでいる。午前9時20分までに運び、その日の食材を丸ごと刻んで1kgにして測定。10ベクレルまで測定できる。その結果、放射能が検出されなかったときは、そのまま給食で使用する。もし、検出されたら、その食材の使用は中止して児童福祉課、市役所へ段階的に報告して対処する様になっている。

今は、毎日測れるが手間が大変なんで週に2回やっている。現場は汲々としているので週2回がやっとという状況。

測定費用は無料だが、測定のための食材の費用は持ち出しになっている。補助するとも言っているがまだ具体的ではない。

これまで放射線量が多く出て、食材を使用できなかったことはさくら南保育園ではなかったがさくら保育園ではあった。

Q2：さくら保育園での具体例を教えてください。

A2：さくら保育園では1ヶ月前に1回あった。さくら保育園もさくら南保育園と同様に行政によって測定してもらっているが、さくら保育園には測定機が1台入っているのも使いながら行っている。

市場には安全なものが並んでいるということになってるが、わたし達も正確さを求めたいということで測定している。

その日は「くきだち菜」を注文していたがそれを測定したとき137ベクレルが出たのですぐに八百屋さんに確認し、持ち帰ってもらい代わりにハウレンソウを持ってきてもらったことがある。市場の方で問い合わせてもらったところ、その「くきだち」は県外産ではなく県内産だった。野菜の検査は一部を抽出しての検査なので、このような結果になってしまったのだと思うが、そのあと、残念だがその「くきだち」は出荷停止になってしまった。

私達の所には測定機が1台あったので安全なもの子どもたちに出せたが、もしも測定機がなかったら子どもたちは内部被曝をしていたのではないかという状況である。

Q3：(菅野さんへの質問と意見) 持続可能性の社会を支えているのは農業であり、漁業であり、林業であるというインパクトのあるお話を伺ったが一消費者に立ち返ってみると、私自身もそうだがなるべく安いものを買いたいという気持ちだと思う。日本の政策を見ても、なるべく付加価値の高い工業製品を売って安い農産物や石油などを海外から輸入することで日本は貿易立国であるし、技術立国で

あると我々は教わったし、社会を見ている。が、菅野さんのお話では転換点であり、我々の社会は従来、国是としてやってきたものに対して、特に原発事故を受けて社会の構造や経済の仕組みをどう変えていくかという岐路に立っているというご指摘だったと思うが、そこで思うのは採算性という問題をどう考えるのか、特に安全で安心なものを食べたいというのを皆さんは共通して持っていると思うがお金がかかる。採算性とバランスというか、戦略としてどういう風に具体的に考えていけば、こういう社会がより多くの人の賛同を得て、日本の社会を変えていけるのか聞きたいのが一点。

もう一点は除染の問題で、昨日は保育園で表土をはぎ取って埋めた中間貯蔵づくりなどがあるが、汚染の度合いで中間貯蔵のあり方がずいぶん違うと思う。非常に低濃度のものであれば当面の飛散を防ぐ意味で非常にいいと思うが、菅野さんは耕作してすき込んでしまう方法もあると。

双葉地区の汚染の高いところには中間貯蔵施設を作ると言っている。もっと深刻なのは高レベル廃棄物についてで、どの自治体も反対して計画が頓挫している。

同じ放射能汚染物質でも低レベルから高レベルまで対処方法が違ってくると思うが、それを我々が取り違えない様に考えていかなければならないと思う。関連した意見をいただければありがたい。

A3 (菅野さん)： 経済成長はないか、脱却する。今までの延長線上の暮らしは望まない方がよいと私は思っている。経済を転換するという意味で転換点と言ったのだが。なぜ双葉地方に原発ができたかといえば山や畑が荒れて、ゴミと産業廃棄物がどんどん東北へ来た。1990年代、いやその前から。私も産廃反対運動を有機栽培農家としてやった。

やっぱり、企業誘致と同じ感覚で原発を誘致してきた。それは地場産業が、農業が、働く場がなかったからだと思う。そのような産業構造を変えていかないと同じ事の繰り返しだと思う。

「ご馳走」という言葉は「馬偏」に「也」と書く。日の出から日の入りまで馬が一日、四方四里、走ってかき集めてくるのがご馳走だと習った。地産地消だ。その土地にあるものをその土地で食べる。脱原発のアクションに行ったお母さんが帰りにマクドナルドのハンバーグを食べるのは…私はいかがなものかと(笑い)。

健康のリスクは放射能ばかりではない。化学物質もある。輸入農産物が増えてからアレルギー問題や家畜の伝染病やいろいろな免疫力を脅かす食べ物が問題になった。

日本の食料は日本で守る。アフリカの食料はアフリカで守る。私は10数年前にスイスやドイツへ行ってきたがドイツへ行けば全部地ビールだ。日本の様な三大ビールはない。地場産業を守って、農業を守って、そこでビールを造っている。スイスへ行けばアルプスの山がきれいだ。なぜそうなのかといえば、200m、400mと標高によって農家が草を刈ってきれいなアルプスの山々を保っている。国が責任をもって農家の所得保障をしている。農業と食生活を守るために責任持って義務を果たすというのが国や自治体の役割だと思う。

今、水よりコメが安い。これでどうしてコメが高いと言うのだろうか。大根一本何十年も100円、ホウレンソウも一把100円、いつまでたっても100円。高いですか?農産物。高くないですよ。一晩に皆さん5000円、6000円酒飲みを支払ってコメが上がったなど言っているが、そういう暮らしのあり方を変えていかなければいけないと思う。

国が責任をもって農業、林業、漁業を守る。子どもたちの健康を守る。そのために自治体や国の役割があるのだと思う。そこをはき違えると有機農業は理想だが高い農産物を食べさせるのかということになる。そういう議論ではないと思う。農業の果たしているダムの役割とか様々な価値、役割を皆で共有化していくということだと思う。

Q4: 菅野さんから紹介して欲しい本があるが?

A4: 実は、1年過ぎた3.11に発刊した本で『放

射能に克つ農業』。最初、署名を「放射能に勝つ農業」としたが勝ってはいないので「克つ」とした（笑い）。放射能から逃げるのではなくて克服するというのでこの本を作った。

放射能に立ち向かってどうしたら生産者と消費者が手を結べるのか、子どもたちの帰れる福島を作れるのか、有機農家と大学の先生が協同で書いた。消費者の方にも書いてもらっている。

去年のワラビを何も知らずに道の駅で採って塩漬けにして今年、塩抜きして測ったら放射線量はゼロになっていた。今年のタケノコは120ベクレルあったが米ぬかであく抜きしたら半分以下に下がっていた。農家も努力するが消費者の皆さんも一緒になって放射能をどうやってへらすのか塩漬け、酢漬け、一緒になって考えましょうと。

ただ、残念ながら乾燥するものの放射線量は増える。大根が20ベクレルだったものが干し大根だと100ベクレルを超えてしまう。水分が飛べば放射能が凝縮されてしまう。でも食べる時水に戻すとゼロに近くなる。だからちゃんと測定して何がどうなのか暮らしの中で放射能から逃げずに向き合いたいと思っている。

Q5：OECDの東北プロジェクトと菅野さんの言われた間にはまだ隙間があると思っている。OECDのプロジェクトに対して私は期待はするがそんなには感動していない。

なぜかという、OECDプロジェクトには最初にストーリーが敷かれている印象をぬぐい去れない。子どもたちが一生懸命やっているのはよくわかるがOECDのキーコンピテンシーというのは分析力とか表現力とか思考力だ。だけどこれらは経済開発機構の期待するものという、そういうストーリーをどうしてもぬぐい去れない。

鈴木寛さんについてはよく知っているが、要するに文科省の中での経済産業系の官僚です。文科省の中にはかつての内務官僚系と通産官僚系の人たちがはげしく争っているわけで別に正義派と何とか派というわけではな

い。通産官僚系の官僚から見ると鈴木さんの路線になる。そして、副大臣として今まで大臣は飾りとして、鈴木さんなんかがつくってある路線を広げてきたというのがすごくある。

僕が言いたいのは菅野さんのようなローカルを徹底していくことによって初めてインターナショナルにも通じるというように僕は思っている。生徒たちは徹底的にローカルな問題にこだわって突き詰めていく、今日のビデオにもあったけど自分の土地を奪われて悔しいという農民の気持ちを現代の若者たちにもつかんで欲しいと思う。そして、有機農家などのあれだけ苦勞されたという問題をつかんで欲しい。

そのことを初めてわかることによってインターナショナルに伝わるものがあるのではないかと思う。最初からパリで、シャンゼリゼで、云々となると僕が一番恐れるのはやっぱり、がんばろう日本で、東北でこんながんばってますのアピールに流れ込まされてしまうのではないかという気がしてしまう。東北の人たちはがんばってますがまだ絶望や失望、それから一緒に流れていった人たちがいっぱいいるわけで、複雑な思いで被災した人たちは今を生きていると思うので、こんなにがんばってますだけのアピールをシャンゼリゼ通りでやるのだったらやっぱり違和感をもつ。そういうイベントに中学生や高校生たちを利用したくないという感じがどうしてもする。

それは中高生の責任ではないし、それに携わっている人たちの責任ではないんだけど、なんとなく隙間とか落差を感じる。今日はすごく大事な問題提起がされたので、私たちはこれから、どうしていったらいいのか、それから現代に生きる中学生、高校生とどのように今の事態を乗り越えていったらいいのか、午後いろいろな方々のご意見を伺いたい。

（文責：吉岡）

※ ※ ※

第18回ながの大会 参加申込書 10月17日締切り

各自（1名ごとに）ご記入ください

氏名・所属	
連絡先 自宅 所属先 (○をつける)	〒 e-mail:
区分	一般 学生 高校生以下

○をつける	費用
大会参加費	一般1000円 大学生500円 高校生以下無料
一般発表	発表する 発表しない（必要事項を下欄に必ず記入）
懇親会・宿泊	懇親会参加（宿泊有・宿泊無）・懇親会不参加 （懇親会参加・宿泊有は一般9000円・学生6000円、 宿泊無は3500円） （宿泊：一般はアゼイリア飯綱、学生はネイチャーセンター）
学生交流会	参加する 参加しない
25日昼食	注文する 注文しない （600円：会場付近にコンビニや食堂はありません）
フィールドワーク	参加する 参加しない
シンポジウム	参加する 参加しない
来場手段	公共交通機関 マイカー
	合計金額

*一般発表者は以下に必要事項を記入してください。
要旨原稿を別紙大会案内の様式で送付してください。

発表タイトル	
発表者・所属 (発表者に○)	
発表使用機器	液晶プロジェクターを 使用する 使用しない その他:

*液晶プロジェクターおよびパソコンは会場に用意します。
USBメモリーまたはCDでデータをお持ちください。

参加申込先

〒3808544 長野市西長野6 信州大学教育学部 渡辺隆一

e-mail: wataryu@shinshu-u.ac.jp Fax: 026.238.4164